当事者スピーチの是非と、リスクに対する意見（抜粋）、および意見書

下記ご意見は、本人の許可を得て掲載しております。掲載許可をいただけなかったためにご紹介できないご意見がありますが、検討においてはすべて参考にさせていただきました。

また抜粋では意図が正しく伝わらない可能性があり、全文掲載を希望される方がいらっしゃいました。ご意見書として文責を明記した上で、全文掲載させていただきます。

当事者スピーチにポジティブな意見
・児童養護施設の子達を普通の子と同じに扱うことも大事ではないかと。なぜなら、これから社会に出るとどんな人でも色々な壁にぶち当たると思います。その時にカナエールのような大きな舞台を、苦労はあっても立派に成し遂げたことが自信につながり、よい経験となってくるのではないかと勝手に推測しております。 ・今回は家族で申し込みました。子どもが二人とも成人になるので、日本の社会で起こっている事を知ることによって社会の一員としての自覚が醸成できればと期待しています。このように当事者の方のお話しをお聞きできる機会はなかなか無いので、もし開催されればありがたいと思っています。 ・子どもの意見表明権（児童の権利に関する条約第 13 条〔表現・情報の自由〕）からも子どもの意思さえはっきりしていればむしろ続けるべきだと思います。いろいろな意見は出てくるだろうとは思いますが、カナエールで発表することのできた子はそれなりに成長し続けています。 ・カナエールを見る前は、ありえないと思いましたが、実際に行ってみて印象が変わりました。新しい発信の仕方だと思いました。 ・コエールは支援する側とされる側が互いに協力して支え合う、対等な関係を目指すという意味でさらにカナエールの先を行っていると思います。 ・私は、小中学と児童養護施設に入居していました。たしかに、自分の経験を伝えたいけど、自分ではコントロール出来ない感情と怖さが襲ってきます。私でも苦しい。なら、他の子たちは もっともっと苦しいのでは？と思うようになりました。私には、奥深くの痛み、傷を外に吐き出すときのリスクや悲しみを、しっかり守ってくれる人達がいます。だからこそ。今まで逃げてきた自分の過去に向き合いさらに幸せになるためにも、伝えます。同じ環境の人が伝えることで、今苦しんでいる人が少しでも楽に生きやすく、自分を好きになってほしいと思っています。 ・私はコエールのプログラム内で自身のケアやサポートをして欲しい為に参加はしていません。支援が必要な人が参加しているのであれば、確かに現状で挙げられているサポートやリスク回避は必要だと感じます。しかし、スタートアップの段階でも説明を受けていますし、さらに手厚いサポートをするのは、コエールの目的や目指すゴールからかけ離れていくのではないでしょうか。

当事者スピーチにネガティブな意見
・やはり、子供達に、対策をするにしても、多少なりともリスクがあるのであれば、開催は中止すべきと考えます。怖い世の中ですから、何かあってからは遅いと考えます。 ・子どもたちに支援が必要なのは子どものせいではないので、子どもたちに語らせたり、何かしら子どもに負担を強いるのはどんな形であれ反対です。本人たちの話を聞かないとわからないというのは大人の想像力不足や勉強不足だと思うので、それは大人が頑張ることだと考えています。 ・虐待のトラウマは、長い年月をかけて向き合う事だと思いますし、同時に親との関係性も整理していくまでに長い時間が必要と思います。そこが何もなされないまま、自分をあちこちで開示し、内面に深い課題を抱えたままの退所者がひっぱりだこになっているようです。 ・安全な場で、が最優先でしょうね。拙速にパブリックスピーチにするのは、最も危険だと思います。パブリックスピーチの最終目的は、主催者にとっては広く周知することかもしれませんが、当事者にとっては、まず、自己の理解を深めることが先にありき、あくまでもその先にパブリックがある、という点を両者が理解していないと、不幸な結果も生まれうる、ということです。

当事者スピーチのリスクに関する意見
・（当事者活動をして）良かった部分は支援してくれるかもしれない人と繋がりやすくなることであり、マイナスの要素では他の人からはそのままま っすぐにではなく色眼鏡を通して見られる可能性が生まれてしまうということです。いくら本人が偏った見方を避けて欲しくても、何らかの「当事者」を名乗って表に出る以上そこは避けて通れないようにも思えました。 ・今までの反省から、また、社会の潮流から、子どもの声を聞こう、という考えかたが台頭してきていることは理解していますが、自分の内面をよく見ずに、支援団体や優しく親切な大人の皆さんを喜ばせるために、また、自分の心の穴を外のもので埋めるために、リクエストに応えて自分の経験をさらけ出すことになっていなければいいと思います。 ・本人たちに選択肢を与えて自己決定した事を尊重していくのは大事な事で、その後のリスクはどんなに入念に対策を練ったとしても、結果的にうまくいかなくなる可能性はあります。ただ、不慮に何かが起きた時、「あなたが選んだ事だから自己責任だ」と居直るのではなく、その時に本人にきちんと誠意をもって謝罪をした上で、その後に本人に寄り添って出来る限りの支援をしていく事が大切だと考えます。 ・「転ばぬ先の杖」は、支援者側のエゴだと思います。子どもの為を思ってよりも、大人が失敗したくない気持ちが強いのではないでしょうか。何かあった時、対応に追われるのは大人ですから。リスクを取らないのは、大人の安全のためになってないでしょうか。 ・（喪失感について）もともと何も持ってない、自分は空っぽだと思っている子がいます。目標に向かって積み上げてきて、スピーチが終わった時に何が残るか。高揚感や達成感がある一方で、もともとあった喪失感、何も持ってない自分に気づいてしまう。支援者が離れれば、孤独感が強まることもある。そういうことなのではないでしょうか。それは何も悪いことではありません。そこからまたスタートすればよいだけです。 ・スピーチで、かっこつけてしまうこともあります。ただ、本当の自分とかけ離れた自分を演じてしまって後から苦しくなることや、成功体験をした後に、でも本当の自分はそうではない、と落ち込むことは誰にでもあります。それに気づくのも大切です。ただ、感情の振れ幅が大きいときには、メンタル面で注意が必要です。 ・（リスクへの懸念に対して）自分で決めて選択したものなのに、過保護すぎます。なにもかも全てのリスクを回避されてはそれこそ私達自身にも成長がありません。

以下、３名の方からいただいたご意見は、文責を明記した上で全文掲載させていただきます。

社会福祉法人白十字会林間学校
社会的養護自立支援事業　あすなろサポートステーション　所長　福本啓介様

「コエール」についての意見

まず最初に、今のままなら「開催に反対」という立ち位置を明確にした上で、私の意見を述べます。誤解を恐れずにお伝えすると、カナエールの時代からこういったプログラムには違和感を表明していました。でも辞めた方がいいとまでは、言ってきておりません。それは私個人の考え方から来るもので、なぜダメなのかではなくて、どうしたらできるのかを積み重ねる方が価値を感じやすいからだと思います。私は、なんとなくいつも違和感はありつつも、それぞれにあった様々な発信の場があるという「場の多様性」みたいなものがあってもいいのではないかと思っています。カナエールやコエールの立ち位置は「２４時間テレビ」と似た立ち位置です。発表したい人が発表して、聴きたい人が聴く、そんな場で良いのではないでしょうか？

次に私の感じている違和感についてです。まず「当事者とは」何か？そこの線を引けない、引きたくない私がいます。声をあげる方、声をあげられない方、あげない方、声をあげるための代弁者の方、日々のご支援の関わりの中で心の声を聴いてくださっている支援者の方、自分が当事者かどうか分からなくて揺れている方、おそらくみんなが当事者で、みんながそれぞれだと思っています。このプログラムでは一部の選ばれた当事者のスピーチがピックアップされ、審判されることで、当事者性が優劣付けられてしまう恐れが常にあります。

福祉を土台にしたアフターケア現場にいると、主体性や発信力を持ちにくい状況にある方に多く出会います。でもそれぞれの方が社会の中で、それぞれなりの社会参加をして暮らして、それぞれなりの小さな発信をしています。支援者や代弁者は聴き取ったご本人の「声にならない声」をケースカンファレンスや支援構造作りの会議等に持ち込む・・誰のために？ご本人の意思がご支援に反映されるようにです。それが、私たち福祉専門職の為すべき当事者の意見表明の場の保障です。日々そんな積み重ねをコツコツやっているわけです、まだまだ未熟で出来てないことも多く、それは決して目立たないけれども。

しかし、Ｂ４Ｓは元々児童福祉がベースではなかったと思います。だからこそ発信・啓発団体として、福祉現場とは切り離してイベント的に開催するのはどうでしょうか？今後児童福祉関係者が、専門家たる当事者の意見表明の場を整え、必要に応じて上手くＢ４Ｓのプログラムと使い分けられるようになれば良いと思うのです。言い換えれば、私たちにそれができていないことの方が課題だと思います。

Ｂ４ＳにはＢ４Ｓの良さがあります。いい意味で、福祉に関する専門知識はひとまず置いておいて、福祉ではない団体として、発表したい方が主体的に、思っていることを他者から曲げられることなく、そのままの言葉や表現で発信して、大人も子どもも、元子どもも、支援者も、声を集めて広げて、そしてお金も人も集めて「一般の社会」に大きく発信してください。それがＢ４Ｓの価値だと、私は思っています。そして、その発信によって「子どもたちのために、社会を変える」という価値の方がとても分かりやすいのです。こういった価値そのものがクリアになる事で、私の感じている違和感は解消されるのだと思います。

思い切ってエネルギッシュに、もしくは文化的にイベント的に発信するならば、それが最も良いと考えます。もし福祉的な視点を不十分に兼ねているような立ち位置でスピーチイベントを行うなら、それは現状望ましくないと思います。恐らく本来の思惑からは逸れて「かわいそう」の声を集めるような結果に陥ってしまいかねないし、発信の機会提供という大人の都合のために、周囲から応援されて、期限に追われて頑張る事や振り返る事、発信することで、大きく消耗して後にしんどくなる方がいるのも事実です。コエールで発信するのが合っている方もいれば、恐らくそうでない方もいらっしゃるわけです。今の時点で私の結論としては「発信の場は子どもの在り様と同じく、多様性があって良いと考えますが、発信・啓発事業や文化活動として切り分けて実施して、福祉や支援からは明確に距離を置くのが望ましい」。以上を持って、私の意見としたいと思います。

弁護士法人ソーシャルワーカーズ
社会福祉士・弁護士　安井飛鳥様

コエールに関する意見について

１　発信をする当事者本人への懸念

当事者が自身のつらい体験を発信することには様々な心理面や社会生活面でのマイナスの影響が生じるリスクがあります。こうしたリスクに配慮して事前に本人へのリスク説明を徹底しかつストラテジック・シェアリング等の手法を参考に発信の訓練を重ねることでリスクを最小限に留めることは可能です。ですが、それでもリスクをゼロにすることはできず何かしらの形でリスクが顕在化して問題が起きるときは起きてしまうでしょう。

だからといってリスクがあるから一切発信をさせるべきではないとまでは思いませんし、最終的には発信をする当事者本人の自己決定を尊重したいと思います。ですが、これが当事者本人の自発的な発信ではなく、他者の促しによるものである場合には話は別です。

他者が発信の機会を設けて発信を促すのであれば、仮に上記のような問題が生じた場合であった場合に本人の自己責任にしてしまうのではなく、５年・１０年という長い年月をかけてでも責任をもってフォローしていくべきだと思います。

コエールでは事前のリスク管理は考えられていたようですが事後のリスク対応についてどこまで責任を持つ覚悟があるのか不透明であったため危うさを感じていました。

２　広報啓発上の懸念

私は日頃弁護士として様々な要因により社会的に弱い立場に置かれていて辛い思いをしてきている人たちと接しています。そうした人たちの窮状は世の中にはまるで知られておらず、それどころか偏見にさらされていることも少なくないため実態を正しく伝え理解を深めていくことの必要性を日々感じています。

しかし、こうした方々に関する発信はやり方を間違えてしまうと思いもよらぬ世間の反感を買ってしまったり、新たな偏見を生じさせてしまったりすることがあります。

例えば昨今の子どもの貧困運動の影響を受けて貧困の子ども達の実情に着目して様々なメディアや団体が発信を試みました。こうした発信によりそれまで光があてられていなかった子ども達の窮状に世間の関心が集まり、子どものための様々な制度や取組が充実化することになりました。その一方で、『それで貧困だなんて甘えだ』、『自分は貧困でも努力している』、『貧困といいながらこんな贅沢をしているのはおかしい』といった声があがりバッシングを受けるようなこともありました。また、同じような境遇の中でなんとか誇りを持って生きている子どもから『かわいそうな子どもというレッテルを貼られた気がしてかえって辛い気持ちになった』というような声もあがりました。

当事者の実情は多種多様です（そもそも社会的養護の当事者とは誰のことを指すのかというところから議論が必要だと思っています）が、その中から更に代表選手を決めて発信させるというのはこうした多様性を殺して社会に特定のイメージのみを植え付けてしまうことにならないかという懸念があります。

代表として選ばれなかった、そのイメージからこぼれてしまった当事者が更なる偏見や排除の対象となり追い込まれるようなことになってしまわないか、そうした形で苦しんでいる当事者をたくさん見てきた経験から今回もそのような事態になることを大変危惧しています。

これは、なにもコエールだけがよくないというわけではありません。子どもの不幸をコンテンツとして無配慮に費消されていくような今の世の中の風潮に強い違和感を抱いています。悲劇や否定的な文脈でないと世の中に受け入れられないから皆、悲劇や否定の言葉ばかりを追い求めるようになります。でも私は否定や不幸の言葉からは結局否定や不幸しか生まれないのではないかと思っています。何かを救うために何かを悪者にして否定して、そうして否定されたところからまた新たな不幸が生じていくだけではないでしょうか。

最近も目黒や野田の虐待死事件に関する世の中の反応等を見ていて同様の危惧感を抱きました。一見すれば児童虐待への理解が深まり社会がより良い方向に向かっているようにも見えますが、世間の強すぎる怒りや悲しみの言葉が子育てに葛藤や不安を抱える親御さんやこれから親になろうとする若者達を追い込む方向に働いているようにも感じます。

特定個人や団体の名称は伏せる形で配慮したとしても否定的な言葉を投げかけられる存在がいる以上、そこから生じる負の側面については慎重になる必要があります。

３　まとめ

Ｂ４Ｓさんは、社会的にもとても強い発信力、影響力をお持ちの団体だと思います。そしてそれだけの強い発信力、影響力があるからこそ、社会全体に影響を及ぼしていくような取組ができると思います。ですが、その強い発信力、影響力ゆえに何かしらの間違いが生じてしまった場合の負の影響もまた大きいと思います。そうした社会的責任を意識した上で今一度、企画内容を再考頂き、子ども達や社会にとって真に良い影響を及ぼしていくような企画が実現することを願っています。

百道庵(ももちあん) 曽我 健二様

◎本当に当事者のスピーチが必要なのか。

■当事者がスピーチをする価値

・当事者のスピーチにより、まだ認識されていない社会問題を顕在化することができる。

・親を頼れなかった経験や感情を本人から直接伝えることで高い説得力をもって問提提起できる。

当事者の声は、とても強く大変効果的だとは思います。しかしながら、単に強い声を発せられるからといって、これまでにも、親から虐待を受ける、親や地域から分離され施設で暮らすなど、たくさんの不利益を被ってきた当事者に、更にリスクを背負ってもらって発信してもらうのは、当事者以外の我々の怠慢ではないでしょうか。当事者が信頼できる人だけが当事者の声を聞くに留め、その声を受け取った当事者以外が当事者のリスクを伴わないように代弁しても良いのではないでしょうか。

◎お金の絡んだスピーチであることによる歪み

■コエールにおけるリスク対策

・活動参加前に、想定されるリスクや対策について説明し、了解を得たうえで申し込みをしてもらう。

・自己開示のリスクや、経験を安全にシェアする方法を学ぶワークショップを実施する。

・スピーチの登壇を強制しない。途中で参加辞退できるようにする。

ということでは、当事者にリスクの受容を自己選択させているに過ぎないと思います。運営側だけがリスク回避をして、当事者にリスクを押し付けてないでしょうか。それも、リスクを甘受することがお金につながるといった不健全な形になっていないでしょうか。

カナエールやコエールには、スピーチすることで奨学金等の多額のお金が得られるという側面があります。当事者たちは金銭のしがらみもある中で自己選択することになっています。当事者がお金のためにリスクを甘受していることはないでしょうか。あるカナエール当事者が漏らした声ですが、「スピーチはしたくなかったが、奨学金をもらうにはスピーチせざるを得なかった。進学するためには奨学金がどうしても欲しかった。」とも言ってました。

◎リスク管理、サポート体制の不備

リスクが発生してしまった場合の対策、あるいは、リスクが発生しないような対策は充分にされているのでしょうか。

■リスク

・スピーチを作る過程で、過去の苦しい経験や感情を想起させる。

運営側として、当事者が過去を振り返っている時に心理的負担を感じてしまった場合、運営側としての対策はあるのでしょうか。あるいは、心理的負担を感じさせないような対策はあるのでしょうか。充分な数の心理職サポータが関わっていればよいのですが。スピーチ作成には、カナエールの時には、ボランティアが三人対応していたように認識しています。この三人に、当事者を心理面からサポートする、福祉的なケアのできるだけの十分な知識や経験はあったのでしょうか。いわゆるうまいスピーチを作成すること、あるいは、イベントでスピーチするというプロジェクトをうまくマネジメントすること、ビデオ撮影編集に長けている人達かもしれませんが、虐待被害に遭った人などの心理的なケアや配慮が可能な人たちだったのでしょうか。別のカナエール参加当事者から聞こえてきた声ですが、ボランティアがズケズケと過去の話を聞き出そうしてきて辛かったという声も聞いたことがあります。このような心理職、福祉職なら絶対にやらないであろうことの防止策はあるのでしょうか。

更に別のカナエールの参加者から聞いた話です。進学後もボランティアとの精神的なサポートが欲しかったが、同窓会程度しか会うことができなく、そんなこともあって学校を続けることが出来なかった。という話を聞いています。当事者の努力が足りなかった、仕方なかったと切って捨てるのは簡単ですが、本当にそれだけの事でしょうか。適切なサポートにより、卒業までこぎつけることはできなかったでしょうか。

◎当事者のためのスピーチになっているか、貴法人のためのスピーチになっていないか。

■当事者がスピーチをする価値

・スピーチは話す内容を事前に準備できるため、効果的な伝え方を検討できる。

という事ですが、「効果的」と言うのが、当事者にとっての「効果的」になっているでしょうか。当事者にとっての効果的とは、当事者が心的負担が少ない状態で、自分自身が発信したい内容を最大限聴衆に伝える事かと思います。会場で一般うけするようなスピーチをするということになっていませんか。以前放送された NHK ハートネット TV でのカナエールに関する放送を見直してみました。当事者が話したくないと言っている内容を、話が良く伝わるからなどと言って話をさせていました。これはイベントの盛り上げのための指摘で、当事者の想いを無視していると感じました。また、コエールの当事者参加者から、自分の話したいテーマと違うテーマを与えられているという声も聞こえてきています。

■リスク

・スピーチ原稿作成や人前で話すトレーニングの過程で過去の捉え方に変化が生じたり、生い立ちが整理されたりする。

確かに、このような効果はあると思います。ある当事者は、ブリッジフォースマイル様以外の場所ですが、登壇してスピーチした経験が生い立ちの整理に役立ったと言っていました。一概にスピーチを否定するものではありませんが、もし、スピーチイベントをするのであれば、お金目当てでないスピーチであること、徹底したリスク管理/アフターフォローを基盤とした、当事者のためのスピーチであるべきであり、なければ実施すべきでないと考えます。

以上